

元首相銃撃は「民主主義への挑戦」か 宇野重規さんが考える「敗北」

2022年7月18日 6時00分



銃撃され亡くなった安倍晋三元首相を悼み、国会には半旗が掲げ

られていた=2022年7月11日午後3時21分、東京都千代田区、上田幸一撮影

•

安倍晋三元首相が銃撃される事件が起きると、「**民主主義への挑戦**」という言葉が飛びかいました。ところが殺人容疑で送検された山上徹也容疑者（41）の動機として、宗教法人「世界平和統一家庭連合（旧統一教会）」への恨みが浮上すると、民主主義の問題として論じることを疑問視する声も出ました。民主主義は関係ないのか。政治思想史が専門の宇野重規・東京大学教授に聞きました。

——事件直後から民主主義という言葉が多用されました。

「新聞や政治家が示し合わせたように『民主主義への挑戦』と表明したことに違和感がある、というのは自然な感覚だと思います。誰が何に対して挑戦したのか、はっきりさせないで使う民主主義という言葉は、中身のないクリシェ（常套句（じょうとうく））になっているように思えます」

「一方で、民主主義の問題ではない、という意見に対しても、違和感があります」

——どんな違和感でしょうか。

「個人的な一種の逆恨みであり、アクシデントだから、政治的な問題ではない、民主主義とは関係がないとする考えは、非常に表層的です。そうした理解には異議を唱えたいと思います」

——ただ容疑者は、安倍元首相の政治信条への異議ではない、とも供述しているようですが。

「宗教団体を恨み、安倍さんがその団体と密接な関係を持っていると信じ、おかしいと思っていたとしても、殺害にいたるには飛躍があります。投票を通じて意思を表明したり、不当にお金をとられたなら世論や裁判所に訴えたり、といった行動をとることができたはずですが、それらをすっ飛ばして凶行に走っています」

「暴力以外で解決できる」 認識なかったとすれば

——選挙や言論や訴訟で自身の境遇を変えられるという認識が、最初からなかったのではないのでしょうか。

「そうした認識がなかったとしたら、これは**民主主義の敗北**だと思います。現代は多くの方が社会に対して不満を持ち、問題を抱えている。たいていは社会的な背景のある問題です。でもあたかも個人の問題のように見えてしまう。『社会問題の個人化』と呼ぶ研究者もいます」

——かつては違ったのでしょうか。

「ひと昔前なら**社会集団の問題**、たとえば**労働者の問題**として、みんなで集まって解決に向け、行動することができました。でも現在は、同じような境遇の人がたくさんいるのに、連帯のしかたがわからず、社会の力で解決していく道筋が見えない。まして投票や選挙によって解決できるとは思っていません」

「多くの方は**自分が悪いと思っただけ**で済みます。でも本当に自分が悪いんだろうかという思いが積もると、どこかで暴発する。そんな事件が近年、続いているように見えます」

「今回の事件がそうだと現時点では言えません。でも安易に個人の勝手な思い違いだと片付けるよりも、**根が深い問題**ととらえた方が、今後に向けた議論ができます」

——今、必要なことは何でしょうか。

「なによりもまず、**安全の回復が急務**です。自分の意見を言っても大丈夫だ、危害を加えられることはないんだという、民主主義の基盤が揺るがされています。政治は危ないものだと認識され、政治離れが進むと、個人の不満を吸い上げる回路がいつそう機能しなくなり、暴発するケースが増えてしまうことを危惧します」

独裁者を倒す民衆の「暴力」、否定できないが

——民主主義の歴史では、暴力は繰り返されてきたと思います。

「民主主義は**その起源から、暴力と切っても切れない関係**があります。本来的に対立を含むものだからです。古代ギリシャで政治の議論をした『民会』が開かれる広場には、武器を持ち込むことが禁止されていました。激しい対立があったとしても、議論の中で相手の命を奪うことがあってはならない。暴力を排除しない限りは議論に加わる資格はないという仕組みを作りました」

「近代の民主主義の画期とされるフランス革命では、絶対王政が打倒され、国王は処刑されました。その後、議会制が形成されていく過程では、**反対派を暴力によって粛清する『恐怖政治』がおこなわれました。このときの『恐怖』を意味するフランス語が、現在のテロの語源です**」

——民主主義のために許される暴力もありますか。

「一般論として、非民主主義体制や独裁者による抑圧的な体制を倒すための**民衆の抗議を、暴力だからと否定するわけにはいかない**でしょう。ただ日本は、成熟した民主主義国家です。自分の不満や怒りを表現しようと思ったときに、暴力に訴えずとも、さまざまな手段が確保されています。あくまで言説で表現しなければなりません」

「政治的指導者への暴力は、単なる一個人への攻撃ではない。その人の体現する政治的な価値に対する挑戦であり、そういった価値をもった政治家同士が競い合う民主主義の否定と言えます。だから**暴力は使わない。その一線を譲ってはいけないという国民的な合意を、改めて確認する必要があります**」（聞き手・真野啓太）

◇

うの・しげき 1967年生まれ。東京大学教授。専門は政治思想史、政治哲学。著書「民主主義とは何か」で石橋湛山賞。